

大江千里「鶯の谷より出づる声なくは云云」

〔古今集〕春上の典拠をめぐる

——和漢比較文学ノート(四)⁽¹⁾——

青木五郎

一

『古今集』春上に収める大江千里の歌

寛平御時后宮歌合の歌

鶯の谷より出づる声なくは春くすることを誰か知らましの典拠については、早く『和歌童蒙抄』(藤原範兼)に、「谷より出るとは、毛詩伐木篇曰、出自幽谷、遷于喬木」と、『詩経』小雅・伐木篇(以下「伐木篇」という)によることが指摘されて以来、契沖の『古今余材抄』、季吟の『教端抄』をはじめ、近代の諸注釈も一様に「伐木篇」をその典拠として掲げている。行論の都合上、先ず「伐木篇」の第一章を挙げてみよう。

伐木丁丁 木を伐ること丁丁たり

鳥鳴嚶嚶 鳥の鳴くこと嚶嚶たり

出自幽谷 幽谷より出でて

遷于喬木 喬木に遷る

嚶其鳴矣 嚶として其れ鳴くは

求其友声 其の友を求むるの声なり

相彼鳥矣 彼の鳥を相るに

猶求友声 猶ほ友を求むるの声あり

矧伊人矣 矧は伊れ人をや

不求友生 友生を求めざらんや

神之聽之 神の之を聴かば

終和且平 終に和し且つ平らかならん

鶯が春になって谷から出て鳴くという千里歌の発想については、窪田空穂に「鶯が冬は谷にこもっているものだ

いうことは、山に囲まれた京都で思われていた事である。故事「伐木篇」をさすか。筆者に拠ったのみのこととは思われない。」(『古今和歌集評釈』上)という見解はあるものの、大江千里が、句題和歌百首を撰し、江家の始祖大江音人を父にもつ儒者であったことに鑑みても、「伐木篇」に典拠を求めるのは正当なことであるといつてよいだろう。

しかし、諸注釈が「伐木篇」を典拠として指摘するのは、あくまで表現上の類似——「鶯の谷より出づる声」と「鳥鳴嚶嚶、出自幽谷」と——という観点からのものであり、「伐木篇」の詩情(詩意)にまで立ち入って両者の関連を考察した上でのものではなかった。この点を鋭く衝いて、千里歌が「伐木篇」を典拠とするといつても、それは「伐木篇」に対する中・日両国の後世の解釈を通してであることを論じたのが、渡辺秀夫氏の「谷の鶯、歌と詩と——〈典拠〉をめぐる——」(『中古文学』第二十一号)である。渡辺氏の論点は、およそ次の三点に要約することができよう。

(1)「伐木篇」にうたわれるのは〈鳥〉であつて〈鶯〉ではない。六朝時代においては、「伐木篇」の〈鳥〉を〈鶯〉と解する例もままあるが、〈春鳥・百舌・それに勿論鶯をも含めた、いわゆる鳥一般〉と解していたのであり、

鳥₁鶯という解釈の固定化は唐代に形成される。

(2)毛伝、鄭箋などの解釈によれば、「伐木篇」は、鳥が幽谷を出て高樹に遷り住んでも、なお昔の友を呼んで鳴くという喩えを借り、たとえ出世して高位についても、旧来の朋友を忘れるべきではない、という人倫・道徳を論じたものである。それ(幽谷より出て鳴く鳥₁鶯)が早春の景物として詠ぜられるのは、六朝梁の蕭統の「姑洗三月」の文に先例はあるものの、やはり唐代になって一般化するものである。唐詩の影響下にある当時の日本漢詩も、〈谷の鶯〉をすべて早春の景物として詠じている。

(3)したがって、早春の到来を告げるものとして詠ぜられた千里歌をはじめ、〈谷の鶯〉として類型化する和歌的世界の表現は、その典拠をただちに「伐木篇」に求めて事足りるとすべきではなく、唐詩における「伐木篇」の解釈、及びそれを承けた倭詩の表現一般に依拠するとみるべきである。

というものである。論旨は明快で、中・日両国の作品について豊富な資料を提示しつつ綿密な考証がなされており、今後の〈典拠論〉の在り方をも示唆する傾聴すべき論考である。小町谷照彦氏も「古今和歌集評釈・うぐひすの谷より出づる声」(『国文学』昭58・12)において、大幅な紙幅を

さいて渡辺氏の所論を紹介しているのも、斯界に広く受け入れられていることを示すものであろう。

しかるに筆者は、渡辺氏の綿密な論考を拝読しても、なお意に満たぬ思いを禁ずることができないのは、恐らく次の一点によるものと思われる。つまり、渡辺氏の所論が、千里歌を「早春の景を詠じたもの」という前提のもとに、その典拠のより適切な出自を、中・日兩國における「伐木篇」受容の歴史の中に見出そうとする試みであった、ということである。というのも、筆者は従前、千里歌には早春の諷詠の中に、後述する「伐木篇」の本義（毛伝・鄭箋などの古注の解釈）や派生義（後生の詩文にみられる「伐木篇」解釈）などの寓意があるのではないかと考えていたからである。

思うに、千里歌が「早春の景を詠じたもの」という前提は、恐らく、当該歌が『古今集』の「春上」に収められていること、古来『古今集』の諸注釈が概してそのように解釈していること、更には後世へ谷の鶯として類型化する和歌的表現がおしなべて春の景物として詠ぜられていることなどによるものかと思われる。しかし、『古今集』春上に収められているのは、『古今集』撰者の千里歌に対する解釈を反映してはいるものの、千里歌の本意如何は別途に

考察を要する場合もあり得ること、また、『古今集』の注釈の中には、後述するように、『和漢朗詠集』へ春・鶯の「鶯未出今遺賢在谷」を引き合いに出して説く『古今抄』（冷泉持為）のごとき注目すべき注釈も存すること、更に、へ谷の鶯」という表現が春景の歌語として類型化するのはいくまでも後世のことであり、千里歌が詠ぜられた当時の「伐木篇」受容の文学的状況を反映するものでは必ずしもないこと、等々の理由により、千里歌が「早春の景を詠じたもの」とする前提は、必ずしも妥当なものとは言えないのではなからうか。筆者の理解に従えば、この場合、方法的にはむしろ逆の操作、すなわち中・日兩國における「伐木篇」受容の歴史の考察が先にあつて、その上で千里歌の解釈の如何が問われるべきではないかと考えるのである。

本稿ではそうした見地に立って、今一度「伐木篇」の後世における受容の在り様を虚心にトレイスすることによって、千里歌の解釈の可能性について、いささか私見をのべてみたいと思う。

二

『詩経』伐木篇は、朋友・故旧を招いて宴会をする時の

詩で、親族に親しみ賢者を友とし、故旧を忘るべきでないことを論ずる作品だと、毛伝の小序にいう。詩の「伐木丁丁、鳥鳴嚶嚶」をいわゆる「興」とみるか（毛伝）、山谷で友人と労働していたときの実景（「賦」とみるか（鄭箋））の相違はあるにしても、毛伝・鄭箋とも、鳥が鳴き交す光景を通して親族・朋友の相和すべきことを歌ったとする点では同じである。また、「出自幽谷、遷于喬木。嚶其鳴矣、求其友声」に付された毛伝に、

君子雖遷處於高位、不可以忘其朋友。（君子は遷りて高位に処ると雖も、以て其の朋友を忘る可からず）

とあり、鳥が幽谷から出て喬木（高い木）に飛び移ることを、人が出世して高位につくことの比喩（暗喩）であると、明確に指摘している。そのため、後世における「伐木篇」を典故とする表現は、「興」や「賦」の部分の自然詠を継承するよりも、寓意されている部分の継承がより顕著である。たとえば、

* (4) 鳥嚶嚶兮友之期 鳥は嚶嚶として友を之れ期す

念高子兮僕懷思 高子を念ひて僕は懷思す

想念恢兮爰集茲 恢を想ひ念ひて爰に茲に集る

（後漢、梁鴻、思友詩）

は、梁鴻が友人の高恢を思い慕う詩であり、

* 2 経彼喬木 彼の喬木を経て

有鳥嚶鳴 鳥の嚶鳴する有り

微物識儕 微物だに儕らを識る

矧伊有情 矧んや伊れ情有るをや

（晋、陸雲、答兄平原詩）

3 華萼相光飾 華萼相光飾し

嚶鳴悅同響 嚶鳴響きを同じうするを悦ぶ

親親子敦余 親を親として子は余に敦く

賢賢吾爾賞 賢を賢として吾は爾を賞す

（南朝宋、謝瞻、於安城答靈運詩）

の二首は、肉親が親しみ睦み合うことを歌う詩であり、いずれも毛伝小序の解釈を踏まえて、「伐木篇」が典故として用いられている（引用の詩文は、所要の部分のみの摘句である。以下同じ）。

4 光光段生 光光たる段生

出幽遷喬 幽より出でて喬きに遷る

資忠履信 忠を資り信を履み

武烈文昭 武は烈しく文は昭らかなり

（晋、劉琨、答盧諶詩）

5 中華有顧瞻之哀 中華に顧瞻の哀しみ有り

幽谷無遷喬之望 幽谷に遷喬の望み無し

(晋、桓温、惠譙元彦表)

6* 疇昔同幽谷、疇昔幽谷を同じうするに

伊爾遷喬木、伊れ爾は喬木に遷る

赫奕盛青紫、赫奕として青紫盛んに

討論窮簡牘、討論は簡牘を窮む

(隋、孔紹安、贈蔡君詩)

などの詩文は、いずれも「出自幽谷、遷于喬木」の部分が、前掲の毛伝の解釈を踏まえて、「官位が昇進する」「出世して高位につく」などの比喩(暗喩)として用いられている。

一方、六朝時代において、「伐木篇」の「興」や「賦」にあたる部分が、自然の景物の典故として用いられている例も、わずかながら存在する。たとえば、早く後漢の張衡の「帰田賦」には、

7 仲春令月 仲春令月

時和氣清 時和し氣清く

.....

王雎鼓翼 王雎は翼を鼓し

倉庚哀鳴 倉庚は哀鳴す

交頤頡頏 頤を交えて頡頏し

関関嚶嚶 関関嚶嚶たり

と、田里の春景として「倉庚(鶯)」が「嚶嚶」と鳥くさま

が詠ぜられ、南朝梁の蕭統の「姑洗三月」には、

8* 伏以、景逼徂春、時臨交節。啼鶯出谷、争伝求友之音。

伏して以ふに、景は徂春に逼り、時は交節に臨む。

啼鶯谷を出でて、争ひて友を求むるの音を伝ふ。

と、晩春の景物として、谷を出て友を求めて鳴く鶯が詠ぜられ、更に、南朝陳の陽慎の「從駕祀麓山廟詩」に、

9 窗幽細網合 窗は幽かにして細網合し

堦静落花明 堦は静かにして落花明し

簷巢始入燕 簷巢には始めて燕入り

軒樹已遷鶯 軒樹には已に鶯遷る

と、山麓の遅い春の点景として「遷鶯」が詠ぜられているものなどが、それである。そうして、以後の「伐木篇」を典故とする受容の在り様は、右の「興」や「賦」の部分の自然詠と、前述の古注の解釈に示された本意とが、相互に干渉し合いながら、さまざまな表現のヴァリエーションを生み出していくのである。たとえば、

10 回首望孤城 首を回らして孤城を望めば

愁人益不平 愁人益々平らかならず

華亭宵鶴唳 華亭に宵鶴唳き

幽谷早鶯鳴 幽谷に早鶯鳴く

(隋)孫万寿、遠戍江南寄京邑親友詩)

のように、「遠く江南を戍る」自己の不遇を「伐木篇」をふまえて幽谷に鳴く鶯に比喻し、仕途を悔いる「華亭鶴唳」の故事(『世説新語』尤悔篇)と共に用いたもの、

11 仮容不足観 仮容は観るに足らざるも

遺音猶可薦 遺音は猶ほ薦む可し

幸蒙喬樹恩 幸いに喬樹の恩を蒙りて

得以聞高殿 以て高殿に聞こゆるを得たり

(南朝梁、沈約、侍宴詠反舌詩)

のように、(反舌)鳥が高樹に遷つて高殿に鳴くという、いわゆる詠物詩の型をとりながら、皇恩を蒙つて昇殿できた喜びを寓するものなどは、そうした作品の一部である。

三

唐代に入っても、「伐木篇」を典故とする表現や作品が数多くみられるのであるが、基本的には六朝時代の受容の在り様を継承するといつてよい。すなわち、純粹に春景としての「伐木篇」を踏まえた詠出は、

12 二月風光起 二月 風光起り

三春桃李華 三春 桃李華さく

鶯吟上喬木 鶯は吟じて喬木に上り

雁往息平沙 雁は往きて平沙に息ふ

(高瑾、晦日宴高氏林亭詩)

13* 出谷鶯初語 谷を出でて鶯初めて語り

空山猿独愁 空山 猿独り愁ふ

春暉生草樹 春暉は草樹に生じ

柳色暖沙汀 柳色は沙汀に暖かなり

(徐浩、謁馬廟詩)

をはじめとして、他にもいくつか見られはするもの、大勢としてはやはり、

14 竜門變化人皆望 竜門の變化は人皆望むも

鶯谷飛鳴自有時 鶯谷の飛鳴は自ら時有り

(王涯、広宣上人以詩賀放榜和謝詩)

15 花迎綵服離鶯谷 花は綵服を迎へて鶯谷を離れ

柳傍東風触馬鞭 柳は東風に傍いで馬鞭に触る

(羅隱、贈高先輩令狐補闕詩)

16 幽谷未見於鶯喬 幽谷未だ鶯喬を見ず

曲沼空勤於鳧藻 曲沼に空しく鳧藻を勤む

(李商隱、為華人献韓郎中殊啓)

17 忽忝專城奉六条 忽ち城を専らにして六条を奉ずるを

忝くし

自憐出谷屢遷喬（遷喬は暫く還る） 自ら憐む谷を出でて屢々遷喬するを

（盧肇、除歙州途中寄座主王侍郎詩）

などの如く、進士に登第すること（14・16）、出世して官位が昇進すること（15・17）などの意を寓するものがほとんどである。ただ、六朝期と異なる現象は、「伐木篇」の「鳥」が「鶯」に特定化して詠ぜられることが多いこと、「伐木篇」の本意を典故とする場合、六朝期には「鳥（鶯）」が表現の背後に隠れていた（4・5・6の例）のに対し、唐詩においては、「遷鶯」→「鶯谷」→「鶯喬」→「鶯遷」などのように、「鶯」が詩の表面に現われてきていることである。つまりそれは、自然詠としての詩語「鶯」と、本意の典故としての「遷鶯」→「出谷」などの語が、語彙レベルで緊密に結びついているというところで、詩境表現としての両者の融合が唐代になって一層促進されていることを反映するものといつてよいだろう。

こうした唐詩一般の傾向は、わが国の平安文学に多大の影響を与えた白居易の詩の場合も同様である。

18* 井鮒思反泉 井鮒は泉に反らんことを思ひ

籠鳥悔出谷 籠鳥は谷を出でしを悔ひ

（孟賈思渭村旧居寄舍弟詩）

19* 山静豹難隠 山静かにして豹は隠れ難く

谷幽鷺暫還（谷幽くして鷺は暫く還る）

（和鄭元及第後秋掃洛下閑居詩）

20* 祥鱣降伴趨庭鯉 祥鱣は降りて庭を趨る鯉に伴ひ

賀燕飛和出谷鶯 賀燕は飛びて谷を出づる鶯に和す

（和楊郎中賀楊僕射致仕後楊侍郎門生合宴席上作詩）

21 不失遷鶯侶 遷鶯の侶を失はず

因成賀燕羣 因りて賀燕の羣を成す

（与諸同年賀主侍郎新拜太常同宴蕭尚書亭子詩）

など、いずれも出仕（18）、帰隠（19）、登第（20）、昇官（21）などの寓意と共に用いられており、純粹に春日の景物として用いられたものは皆無である。

その他、いわゆる「詠物詩」の中にも、

22 欲轉声猶波 轉らんと欲するも声猶は波り

將飛羽未調 將に飛ばんとするも羽未だ調はず

高風不借便 高風借るに便ならず

何処得遷喬 何れの処にか喬きに遷るを得ん

（鄭愔一本、詠黃鶯兒詩）

のように、「黄鶯兒」に托して作者の「志有るも酬ひ難き」感慨が寓せられているもの、

23 写囀清弦裏 囀りを写す清弦の裏

遷喬暗木中 喬きに遷る暗木の中

友生若可冀 友生若し冀ふ可くんば

幽谷響還通 幽谷に響き還た通ぜん

(李嶠、鶯詩)

のように、鶯が友生を求めて鳴くという「伐木篇」の本来の詩意に沿った詠出など、単なる自然詠としての詠物の域を越えた寓意を認めうる作品があるのも、六朝期と同様である。

こうした中で注目すべきは、唐代に行われた官吏登用試験「省試」の題詠にみられる、「伐木篇」を典故とする表現群である。いまは煩を避けて、大曆年間の省試題「小苑春望宮池柳色」と、開成年間の省試題「鶯出谷」とについて触れることにする。

『文苑英華』卷一八八には、「小苑春望宮池柳色」と題す作品が十首収められているが、その中の四首に「伐木篇」を踏まえた表現がみえている。

24 上林新柳變 上林 新柳變じ

小苑暮天晴 小苑 暮天晴れたり

漸到依依処 漸く依依の処に到り

思聞出谷鶯 谷を出づる鶯を聞かんことを思ふ

(黎逢)

25 小苑宜春望 小苑 春望に宜しく

宮池柳色輕 宮池 柳色輕し

他時花滿路 他時花 路に満つるとき

從此接遷鶯 此より遷鶯に接わらん

(丁巳)

26 勝遊從小苑 勝遊して小苑に從へば

宮柳望春晴 宮柳 春の晴るるを望む

願駐高枝上 願はくは高枝の上に駐りて

還同出谷鶯 還た谷を出づる鶯に同じからんことを

(楊承)

27 韶光婦漢苑 韶光 漢苑に婦し

柳色發春城 柳色 春城に發す

儻得辭幽谷 儻し幽谷を辭するを得ば

高枝寄一名 高枝に一名を寄せん

(張季略)

いずれの作品も試題の「小苑春望宮池柳色」の情景を織り込んで詠い起し、末尾を「伐木篇」の典故を踏まえて、省試の登第を願う気持を詠出したものである。試題と「伐木

篇」との関連は、中国においては、〈鶯〉は〈柳〉と共に詠ぜられるのが一般だったからであろう。⁽¹¹⁾これらの諸例は、「伐木篇」を出自とする「(幽)谷を出づる鶯」「喬〔高〕木に遷る鶯」という表現が、表面上は試題の要求する春景の中に収まりながら、「伐木篇」を典故とすることによって、単なる春景の域にとどまらない、作者の志の詠出にもなっていることを示すものである。このことは『文苑英華』巻一八五に収める開成年間の省試題「鶯出谷」(四首)には、当然のことながら一層顯著にあらわれている。

28 幸因辞旧谷 幸いに旧谷を辞するに因りて

従此及芳晨 此より芳晨に及ぶ

欲語如求友 語らんと欲して友を求むるが如く

初飛似畏人 初めて飛びて人を畏るるに似たり

喜遷喬木近 喬木の近きに遷るを喜び

寧厭対花新 寧んぞ厭はん花の新しきに対するを

堪念微禽意 念ふに堪へたり微禽の意の

関関也愛春 関関としてまた春を愛するを

(劉莊物)

29 玉律陽和交 玉律 陽和に交じ

時禽羽翻新 時禽 羽翻新たなり

載飛初出谷 載ち飛びて初めて谷を出で
一嘯已驚人 一たび嘯りて已に人を驚かす

求友心何切 友を求むる 心何ぞ切なる

遷喬幸有因 喬きに遷る 幸に因る有り

華林高玉樹 華林の高き玉樹に

棲託及芳晨 棲託して芳晨に及ばん

(錢可復)

いずれも、暖かい陽気に誘われて谷を出た鶯が、友をさがして鳴きながら、高樹に遷り棲んでいつまでもよき春の日を満喫したいと思う気持ちで詠ぜられている。今まで考察したことをふまえれば、〈鶯〉が作者に、〈友〉が先輩に、〈出谷〉〈遷喬〉が官吏として登用されることに擬せられていることは見やすいこととして、これらの詩においては、〈芳晨〉〈春〉などの語が太平の御世の暗喩として用いられていることにも注意しておきたい。

以上、六朝から唐詩まで、「伐木篇」の受容について概観してきたが、要するに、千里歌との関係で問題になる「鶯が谷から出る」という表現も含めて、中国詩における「伐木篇」受容の態様は、春景としての単なる自然詠としてよりも、古注に示された「伐木篇」解釈の思想が、明に

暗に寓意される場合が一般であった、ということである。

四

翻つて、当時のわが国の漢詩の世界に目を転じてみよう。「伐木篇」を典故とする表現をもつと考えられるものに、先ず『懷風藻』の次の二首、

30 以此芳春節 此の芳春の節を以て

忽值林下風 忽ち林下の風に値ふ

求友鶯媽樹 友を求めて鶯は樹に媽やかに

含香花笑叢 香を含んで花は叢に笑ふ

(釈智蔵、甌花鶯詩)

31* 花色花枝染 花色 花枝に染まり

鶯吟鶯谷新 鶯吟 鶯谷に新たなり

臨水開良宴 水に臨んで良宴を開き

泛爵賞芳春 爵を泛べて芳春を賞つ

(春日蔵老、述懷詩)

があるが、これらはいづれも「芳春」の季節を詠じたものであるろう。続いて『文華秀麗集』にみられる、

32 長天去雁催帰思 長天の去雁 帰思を催し

幽谷來鶯助客啼 幽谷の來鶯 客啼を助く

一面相逢如旧識 一面相逢ふて旧識の如し

交情自与古人齊 交情自ら古人と齊し

(坂上今継、和渤海大使見寄之作詩)

は、「幽谷來鶯」によつて友を求めて鳴く「伐木篇」の意を寓し、今継と渤海大使との「交情」を詠じたもの。また、『経国集』の、

33 遼谷黃鶯無儔侶 遼谷の黃鶯 儔侶無く

冬天不語在荒林 冬天に語らずして荒林に在り

年来更過陽春候 年来り更に過ぐ陽春の候

波啼一喚旧知音 波啼一に呼ぶ旧知の音

(嵯峨天皇、和滋貞主城外聽鶯簡前藤中納言之作詩)

は、全篇「鶯」詠ではあるが、志を得ない孤独な士が旧知の引き立てを求める意が寓されているとみてよいだろう。⁽¹³⁾

更に、『田氏家集』の、

34 四序調均第七年 四序 調均して第七年

三朝自与立春旋 三朝自ら立春と旋る

鳩飛使放東風去 鳩は飛びて東風に放ちて去らしめ

鶯出先登南樹遷 鶯は出でて先づ南樹に登りて遷る

(七年歳旦立春詩)

は、大平の治世を謳歌するのに、鳩が放生され「列子」説符篇、賢者が登用される（伐木篇）典故を用いたものであり、

35了得行藏能在我 行藏能く我に在るを了得するも

憐他飛伏必依人 他の飛伏必ず人に依るを憐む

応同鶴滯重臯日 応に鶴の重臯に滯る日に同じかるべ

く

孤負鶯遷喬木春 孤り鶯の喬木に遷る春に負く

(看侍中局壁頭挿紙鶯呈諸同志詩)

は、賢才が登用される治世(「鶯遷喬木春」)に、不遇に甘んじていること(「鶴滯重臯日」)を詩題の(紙鶯)に寓して詠ったものであるが、それぞれ「伐木篇」及び『詩経』鶴鳴篇の典故が用いられている。

このように日本漢詩においても、「伐木篇」に典故をもつ表現(当面特に問題となる(谷)とかかわる(鶯)も含めて)は、単なる季節詠に用いられることもあるものの、その大勢は中国詩と同じく、「伐木篇」の古注に示された解釈に沿う寓意をやどしながら詠出されているといつてよい。このことは、その詩作に「伐木篇」の典故を多用する菅原道真の場合も全く同様である。

たとえば、「早春侍内宴賦聴早鶯心製詩」では、

36不怪鶯声早 鶯声の早きを怪しまず

心縁楽歳華 心に歳華を樂しむに縁るべし

偏飲初出谷 偏に飲ぶ初めて谷を出づるを

謝絶旧烟霞 謝し絶つ旧の烟霞を

と、(鶯)が烟霞のたちこめる幽谷を出て春景を樂しむことの裏に、作者が内宴に侍する光榮を飲ぶ意を寓して詠われており、「詩友会飲同賦鶯声誘引来花下詩」にも、

37鳥声人意両嬌奢 鳥声人意両つながら嬌り奢る

処処相尋在在花 処処に相尋ぬ在在の花

身已遷喬来背翼 身は已に喬きに遷り来りて翼を背け

道如求友趁廻車 道は友を求むるが如くにして車を廻

らす

閑計新巢紅樹近 閑かに新巢を計れば紅樹近く

苦思旧谷白雲除 苦ろに旧谷を思へば白雲除かなり

のように、旧谷を出て花のさく紅樹の間を飛び交う(鶯)(鳥声)と、出世してわが世の春を樂しむ詩友(人意)と

が重ねて詠ぜられている。更に、先にあげた唐代の省試題

「鷺出谷」を用いたわが国の昌泰二年の内宴の席での作

「早春内宴侍清涼殿同賦鶯出谷心製詩」は、

38鶯兒不敢被人聞 鶯兒敢へて人に聞かれざるも

出谷来時過妙文 谷を出でて来る時妙文に過ぎたり

管絃声裏啼求友 管絃の声裏啼いて友を求め

羅綺花間入得群 羅綺の花間入りて群を得たり

恰似明王招隱処 恰も似たり明王の隱を招く処

荷衣黃壞応玄纒 荷衣黃に壞れて玄纒に應ずるに

と、出谷した鶯が友を求めて花間に鳴きわたるさまを、明君が山谷の士を招くさまに似ていると詠ずることによって、太平の御世を賛美する作品となっている。

こうした「応製」「会飲」「侍宴」といった宮中の文学サロンにおける詠作のもつ文芸性は、先の「詠物詩」や「省試題」をも含めて、別途に詳細に検討する必要があると思われるが、こと「伐木篇」を典故とする表現の位相については、日本漢詩もまた中国詩と何ら異なるものではない、⁽¹³⁾と云ってよいだろう。

五

さて、以上述べてきたような中国詩、日本漢詩における「伐木篇」受容の歴史の延長線上に、大江千里歌

鶯の谷より出づる声なくは春くることを誰か知らましを置いてみたとき、筆者には『古今集』諸注釈が解くような単に早春の景を詠じた歌とのみ解することは、⁽¹⁴⁾どうしてもできないのである。そしてそれは、千里歌の歌意の解釈

とも深く関わっている。

通常、右の歌は、谷から出て鳴く鶯の声を聞いて春の到来を実感したことを、もしその鶯の声がなかったならば云云、と反面から歌ったいわゆる反実仮想の歌と解されている。⁽¹⁵⁾もちろん、「なくはまし」と呼応する表現は、

かたみこそ今はあたなれこれなくは忘るる時もあらましものを(『古今集』恋四・よみ人しらず)

衣手におつる涙の色なくは露とも人にいはましものを(『千載集』恋二・二条院参川内侍)

の例にまつまでもなく、反実仮想としての用法が一般的であるのは確かである。また、早春の景を詠じたとすれば、そのように解するのが正しいのであろう。しかし一方で、

さかりをも見る人なくは桜花散るをいとかく思はましやは(『躬恒集』)

のごとく、「なくは」を仮定条件、「まし」を単なる推量と解釈し得る歌も存在することから、筆者は従前千里歌についても、「鶯が谷から出て鳴く声がないうちは、春が来たことが誰にわかるうか。鶯が谷から出て鳴く声がないので、春が実感できない」という解釈が可能ではないかと考えている。後述する冷泉持為の『古今抄』や、『新撰万

葉集』の千里歌の漢詩訳、

元鶯溪潤趁吠音 元鶯溪潤に趁きて音を吠く

山野領主汝來賓 山野は領主汝は來賓

毎年思量帰都日 毎年都に帰る日を思量するに

我何歳知汝明春 我は何れの歳ぞ汝は明春なるを知る

が、その立場で解釈されているのは、筆者を勇気づけてくれる⁽¹⁶⁾。もし、そうした解釈が可能であるとすれば、千里歌が単なる早春の季詠にとどまらず、季詠の背後にへ出

谷へ遷喬)できない(鶯)つまり出世して高位につけない作者の不遇が寓意されているとみることが、如上の「伐木篇」を踏まえた漢詩世界の表現に鑑みても、ごく自然なことではないだろうか。冒頭にも述べたごとく、千里が名門の儒者の出であり、句題和歌百首を撰していることからしても、そうした漢詩世界の動向に無縁であったとは思われない。加えて、千里には、

葦鶴あしちのひとりおかれて鳴く声は雲の上まで聞え継つがなむ(古今集)雑下)

という、『詩経』小雅・鶴鳴篇の「鶴鳴于九臯、声聞于野。

……鶴鳴于九臯、声聞于天」を踏まえた歌があるが、この歌については、たとえば、

一人だけ官位昇進の遅れた作者自身を、仲間に遅れた

鶴にたとえたもの。(小学館、日本古典文学全集『古今集』)というように解されている。恐らくそれはこの歌が「雑」の部に収録されているからであろう。

しかし、同じく『詩経』を典故とし、詠法も酷似した同一作者のこの二首について、一方は「春上」に収められていることをもって単なる季詠とし、他方は「雑上」に収められているために寓意があると解するのは、『古今集』の撰者の意向を反映した『古今集』の読みとしては許されても、千里歌そのものの解釈としては一面的との譏りを免れないのではなからうか。因みに、先に挙例した『田氏家集』の、

応同鶴滞重臯日 応に鶴の重臯に滞る日に同じかるべ

く

孤負鶯遷喬木春 孤り鶯の喬木に遷る春に負く

という二句が、はしなくも千里歌の二首に対応しているということは、千里の(鶯)歌も、(鶴)歌と同じ表現位相(つまり寓意があること)をもつものとして享受されるべきことを示唆するものといつてよいだろう。⁽¹⁷⁾

そのような観点から、今一度古来の『古今集』の注釈を繙いてみると、冷泉持為の『古今抄』(一四五〇年)に次のような注目すべき注釈を見出すことができる。

詩云、鶯未出遺賢有谷と云よりするにてよめる也。是ハ商山四皓の谷よりいでて漢の惠太子をたすけて、天下をのどかになせる事をおもひよそへて誦也。されは谷より出る声なくハ春くる事を誰かしらましとは、世の長閑になれる事をも誰かしらましと云心なり。

「詩云、鶯未出遺賢有谷」というのは、『和漢朗詠集』
〈春・鶯〉に収める唐の賈嵩の「鳳為王賦」、

雞既鳴兮忠臣待旦 雞既に鳴いて忠臣旦を待ち

鶯未出兮遺賢在谷 鶯未だ出でずして遺賢谷に在り

の下旬を指す。賈嵩のこの句は、鶯がまだ谷から出て鳴かないことと、賢者が登用されずに逼塞していることが重ねられており、千里歌の典拠をこの句に求めて、〈鶯〉を隱士（賢者）に、〈春〉を〈世の長閑になれる事〉によそえて詠んだとする『古今抄』の所説は、前述した「伐木篇」を典故とする漢詩の表現位相と軌を一にするものといつてよい。『古今抄』の所説が、「まし」を反実仮想としてではなく、単なる推量と解した上に成り立っているのは言うまでもない。しかし、この『古今抄』の注釈は、その後『古今集抄』などに一部引用されることはあつても、ほとんど顧られることがなく、近代の諸注釈も、管見の及ぶところこの説に言及するものを見ないのである。恐らくそれは、

先にも述べたごとく、千里歌が『古今集』春上に収められることによつて、千里歌が本来もつていた寓意が無化されたためである。先にも述べたごとく、『古今集』収録歌としての読みとしてはそれでもよいかも知れないが、千里歌そのものの読みとしては重要な側面を欠落させてしまふ結果になっていると言わざるを得ないのである。

なお、『古今集』の撰者の一人紀貫之には、三統元夏との間に、

おなじ元夏がもとより

東風に氷解けなば鶯の高きに移る声を告げなむ

と云へるかへし

ゐて伝ふ花にもあはぬ鶯は谷にのみこそ鳴きわたりつ
れ（『貫之集』巻九・雑）

という贈答歌が残されている。渡辺氏によれば、「政治的庇護者を失なつた貫之晩年の不遇時代の贈答歌」で、時を失なつた我が身の不遇を〈谷に住む鶯〉によそえて歌つたものだと言われる。とするならば、貫之自身は千里歌に上述のような寓意があることは知悉していたはずである。にも拘らず、千里歌を「雑」にはなく「春上」に収めた撰者として意図がどこにあつたのかは、また別に問われなけ

ればならない問題であろう。

注

(1) 本稿は次の三編に続くものである。

1 「故郷をいつれの春か行きて見む云云」(『源氏物語』須磨)の典拠ほか——和漢比較文学ノート(一)——(京都教育大学国文学会誌第二十二号)

2 「野ざらし紀行」冒頭文及び富士川捨ての子の条をめぐって——和漢比較文学ノート(二)——(京都教育大学国文学会誌第二十三号)

3 『唐物語』第十八話(玄宗・楊貴妃譚)について——和漢比較文学ノート(三)——(京都教育大学紀要第九十号)

(2) 便宜にいくつかの注釈を抄録しておく。

○いまだ春とも思はぬほどのおりふしに時をしりて鳴出たるを愛してかくよめるにや。(東常縁『古今和歌集兩度聞書』)

○大かた春のくるを誰もわき侍れど、鶯の春をまち出て、あらたに鳴出たるを感じていへる也。只鶯を愛したる心なり。(宗祇『古今和歌集聞書』)

○実際は春とも感じられない時に、たまたま谷から出た、即ち初めての鶯の声を聞いて、……春の来ていることを漸くに思い云云。(窪田空穂『古今和歌集評釈』上)

○平安京で見られた早春の風景であろう。鶯の声で喜びを表現したのだが、「もし鶯の声がなくては……」という理知的な表現形式をとっている。(小学館、日本古典文学全集『古今集』)

(3) 「伐木、燕朋友故旧也。自天子至于庶人、未有不須友以成

者。親親以睦、友賢不棄、不遺故旧、則民德歸厚矣」(伐木篇・小序)

(4) *印を付した用例は、渡辺氏も引用しているものである。

(5) 「王雉」は「雉鳩」のことで、「関関」の語には『詩経』の「関関雉鳩、在河之洲」が踏まえられているとしたら、「嚶嚶」の語にも「伐木篇」が踏まえられているとみてよいだろう。そうすると、この「帰田賦」が「伐木篇」のへ鳥をへ倉庚(鶯)と解釈した最も早い例といえる。

(6) 「伐木篇」の本意を踏襲する1・2・3の用例では「伐木篇」と同じくへ鳥であるいはへ嚶鳴であったのが、春の景物として詠ずる場合はいずれもへ鶯(倉庚)として、具体的な鳥名が与えられているのは興味深い。

(7) 渡辺氏も指摘しておられるように、六朝期には「伐木篇」のへ鳥は不特定であって、「反舌(百舌)」の典故としても用いられる。挙例した作品の外にも、南朝梁の劉孝綽の「詠百舌詩」にも「遷喬声迥出、赴谷響幽深」とある。ただ、唐代に入っても、祖詠の「汝墳秋同仙州王長史翰聞百舌鳥詩」に「遷喬誠可早、出谷此何遲」とみえている。

(8) 侍宴詩や詠物詩の文芸性については、別途に考察しなければならぬが、ここでは当該詩が作者の昇殿の喜びを寓する作品であることが確認されればよい。

(9) 『文苑英華』の省試題に収める作品の中で、「伐木篇」を典故とする表現が用いられているものは、本文に掲げたほかに、「柳陌聽早鶯」(陸展)、「鳥散余花落」(竇洵直)、「好鳥鳴高枝」

(鄭葵) などがある。

(10) 『全唐詩』には、この十首のほか、陳羽・歐陽詹の同題の作品が、それぞれ一首ずつ収録されている。

(11) わが国では「梅に鶯」と言われ、「鶯宿梅」の故事もあるなど、「梅」と共に詠まれるのが一般であるが、中国では注(9)の省試題にも「柳陌聽早鶯」とみられるように「柳」とのとり合わせが一般的であった。

(12) 天皇の詩であるが、題詠ということで詩題のもつ詩世界が詠出されていなければならないであろう。あるいは詩題の滋野貞主が「黄鶯」に、前藤原中納言が「旧知」に擬せられていると読むことができるかもしれない。

(13) 「文」についても、多少時代は下がるものの、三善道統(善行の孫)の昇官を願う「請被特蒙恩恤因准先例孝達升官右衛門権佐闕状」(『本朝文粹』卷六)に、

望請特蒙恩恤、孝達件闕。……然則病雀喰花、生羽翼於暖雨、寒鶯出谷、戴恩煦於春風。

とみえている。

(14) (15) 注(2)を参照。

(16) 松田武夫『新釈古今和歌集』(風間書房)の次の解説もその立場で解釈したものであろうか。

「谷の戸を出て里で鶯が鳴くようになったので、春の来たことがわかった——というのでは平凡なので、『なくは……まし』と、裏返しに表現して、詩的表現とした。鶯の声を一途に待ちこがれる心境は前の歌に等しい。」(圈点、筆者)

(17) 同じことは、菅原道真の歌「谷深み春のひかりの遅ければ雪につつめる鶯の声」(『新古今集』雑上)についても言えることとで、表現の位相は千里の「鶯」歌とほとんど変らないのに、たとえば「光を君の恩光、雪を讒人、鶯は賢者に譬えた述懐であろう」(小学館、日本古典文学全集『古今集』)という解釈が与えられるのは、「雑上」に収められているからであろう。

(18) 京都在学国語国文学資料叢書。室町期までの古今集の諸注集成。(京都教育大学)

(付記)

『古今集』の諸注釈の収集などには、山岡道子氏の労をわずらわした。記して感謝の意を表したいと思う。